

# 覚鑿の真言観について

—『五輪九字明秘密釈』を中心として—

兎 島 祥 萌 子

## 一 はじめに

興教大師覚鑿（一〇九五—一一四三）の著作のなかには、真言や陀羅尼について多くの記述が残されている。このことから、覚鑿が真言や陀羅尼を重要視していたことがわかる。また、覚鑿は修観の人としても広く知られており、覚鑿は空海が修したことで知られる虚空蔵求聞持法を八回とも九回とも修したとされ、さらには、虚空蔵求聞持法を修した際に立てた願文などによれば、尊勝陀羅尼を不断で念誦したといった記録が<sup>(1)</sup>残されており、その重要性を著作に留めるだけでなく、実際に自らも修していたことから覚鑿が真言や陀羅尼を重んじたことは明らかである。

そこで、真言行者として欠かすことのできない真言や陀羅尼を覚鑿がどのように理解し、受け止めていたかを探るべく本稿では『五輪九字明秘密釈』に着目した。『五輪九字明秘密釈』は、覚鑿晩年の代表的な著作である

とされていることから、覺鑊の思想を探るうえでは欠かすことのできない大切な著作であるといえる。よって、『五輪九字明秘密釈』に見られる真言觀の特色を考察しながら、本稿を覺鑊の真言觀を理解するための端緒としたい。

## 二 『五輪九字明秘密釈』における真言について

『五輪九字明秘密釈』は、諸写本の跋文によれば、「そもそもこの秘釈を記した後、三摩地に入る。忽然として化現して宝生房の云く云」と記されていることから、覺鑊の師事した宝生房教尋の滅後（永治元（一一四一）年、三月二十三日）から、覺鑊の遷化（康治二（一一四二）年十二月十二日）までの間に著された晩年の著作であると目されている。そのなかでも以下の偈文に見られる真言觀に着目した。

一字入万病不生即身成仏頌に曰く、もしくは凡、もしくは聖、灌頂を得る者、手に塔院を結び、口に~~ま~~字の明を誦し、われは大日となりと観ず。疑惑なき者は、現在生の間に、頓に無明を断じ、および五逆罪、四重八重、七逆越誓、謗方等経を謗る。一闍提等の無量の重罪、皆ごとごとく断滅して、少罪もあることなければ、即身に成仏す。永く生死を離れて、つねに衆生を利し、間断あることなし。十方の如来は、常に随つて守護すべし。三世の諸仏、皆授記を与う。設え衆罪を造るとも、ことごとく善行と成る。設え智觀なくとも、現に仏果を證す。凡そ諸のあらゆる挙手動足みなこれ密印なり。所有の言語はすなわち真言と成り。あらゆる心念、自ら定慧となり。万徳自ら嚴る。もし結ぶこと一遍すれば、すなわち、つねに一切の諸印を結ぶに越え、もし、誦すること一遍すれば、また恒に無量の真言を唱うるに過ぐ。もし、観すること一念すれば、

定んで三世に無量定に入つて、妙観を修習するにも勝る。もし、衆生あつてこの功德を聞いて、信を至さざるものは、まさに知るべし。この人は、定んで無間に墮し、よく仏種を摧かん。諸仏も救うことなし、なんぞいわんや余人をや。

〔『興教大師全集』以下『興大全』下・一一五―一二五二頁〕

この頌は、真言の各流によつて名称がそれぞれ異なり、報恩院流・中性院流・地藏院流などでは「瑜祇切文の大事」といい、伝法院流では「五輪九字の大事」、または、「即身成仏義言・切文」といい、勸修寺流では単に「偈頌」と呼び、安祥寺流「若凡若聖の大事」という。また、御流・華藏院流・慈猛意教流・沢方の三輪流などは「法皇灌頂」といい、西大寺流では「瑜祇灌頂」と称している。

『五輪九字明秘密積』においては、「一字入万病不生即身成仏頌」と称されており、この頌は覚鑿が伝法受法の際に伝えられたものであるとされている<sup>③</sup>。

この所伝の偈には、多くは五十四句であり文言も多少の相違が見られる、ただし、中性院流には五十二句の頌と五十四句の頌を相伝している。

また、この頌の作者については、不空・惠果・空海・空海・覚鑿や作者不明などの所説ある。覚鑿ともいわれる所以は、覚鑿の著作のなかに『瑜祇切文』（『興大全』下・八二九頁）があることによる。また、『<sup>④</sup>字密観』のなかにも「即身成仏の義に云く」（『興大全』下・一〇八五）として引用されている。

頼瑜（一二二六―一三〇四）の『真俗雜記問答鈔』第十八<sup>④</sup>によれば、この頌は小野勸修寺流良雅方の祖、良雅（一二一〇）から明叔（一二二四）に伝授され、明叔から覚鑿に伝授されたと説と醍醐三寶院定海（一〇七四

（一一四九）から覺鑊に伝授されたとする説がある。この他、寛治年間（一〇八七—一〇九三）に白河法皇が高野山に行幸された際、歴代天皇が護持された『瑜祇切文』を明寂に預けたとする伝承のような説もある。

また、覺鑊はこの頌を「切文事」として、この頌は、空海が中国からこの頌を伝えたといわれていることが記されている。この頌の作者はいずれにしても、この頌が覺鑊にとつて重要なものであったことは疑いようがない。

この偈文のなかで注目すべき点は、口に金剛界の種子であるま字の明を誦し、我、つまり自身が大日如来であることを観じることに疑惑のないものは、あらゆる罪、どんな小さな罪であつても断滅し、何の罪もない。したがつて、即身に成仏できるとしている。そして、即身に成仏しているから、永く生死を離れてつねに衆生を救つている。十方の如来が守護し、授記を与えられるとしている。また、多くの罪をつくつたとしてもことごとく善行となり、智観なくとも仏果を證すとして、あらゆる拳手動足がすべて密印であるとし、所有（あらゆる）の言語は真言であるとの解釈がなされていることである。

このような、所有の言語が真言であるとの記述は『五輪九字明秘密釈』において、この他に二箇所<sup>(5)</sup>みることができ。また、拳手動足みなこれ密印なりといった動きが密印であるとの記述も、同様の箇所に見ることができ。る。

この「所有の言語が真言である」との解釈は、前に挙げた通り、この頌文が覺俊房明寂より伝授されたとされているものであるから、覺鑊より以前から「所有の言語は真言である」言われていたことがわかる。

作者が覺鑊であるとの説もあるが、この頌が伝えられたものであるとするならば、その解釈の源流をつぶさに見ていく必要があるであろう。覺鑊がこの頌をどのように解釈し、なぜ引用したのか、その源流を探ることとする。

### 三 「一字入万病不生即身成仏頌」について

この「所有の言語は真言である」との解釈の源流はどこにあるのだろうか。その源流は法全集『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幡普通真言藏広大成就瑜伽』（『大正藏』十八卷・八五三番）の次の箇所に見ることができるとは、

また、秘密主よ。ないし身分の舉動住止はまさに知るべし。みなこれ密印なり。舌相所転の衆多の言説は、まさに知るべし。みなこれ真言なり。もし阿闍梨が明に瑜伽を解し、深く秘密の趣きに達し、能く菩提心を浄むれば、心は浄なるを以てのゆえに、秘密の法に通達す。ゆえにあらゆる所作はみな衆生を利益し、調伏せんがためなり。施なするところに随つて、仏の威儀に順せざるなし。一切身分の挙動、施為は、これ密印ならざるなく、所有の言語はみなこれ真言なり。

（『大正藏』十八卷・一六三頁・下）

### 覚鑠の真言観について

この『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幡普通真言藏広大成就瑜伽』の成立は、唐代に法全が中国の青竜寺で著したとされていることから、『青竜寺儀軌』・『青竜軌』・『青軌』ともいう。三巻本であり、『大日経』に基づく供養儀軌であり、胎藏法四部儀軌の一つに数えられる。編者である法全が玄法寺にて著した玄法寺儀軌に対して、青竜寺に移つてからのものなので本軌を青竜寺儀軌という。上巻には、九方便・四無量心・入仏三昧耶・法界生・金剛薩埵・金剛甲などと次第とする供養法の諸作法が説かれる。中巻の巻末より下巻にわたっては、

曼荼羅諸尊の印明や正念誦・後供養・加持句などが説かれている。内容は、玄法寺儀軌よりもさらに整備されている。また、当儀軌所説の曼荼羅諸尊のなかには、観音の眷屬に四摂智・八供養菩薩の諸尊を加えていることから、『金剛頂經』に基づく供養法である金剛界法を取り入れられている。

このように、『大日經』に基づく供養儀軌であるこの『青竜寺儀軌』の本拠は『大日經』である。この一文の中でも、「また、秘密主よ。ないし身分の擧動住止はまさに知るべし。みなこれ密印なり。舌相所転の衆多の言説は、まさに知るべし。みなこれ真言なり。」までは『大日經』の引用（『大正藏』十八卷・二十頁・上）である。また、この一文は空海の『十住心論』にも引用されており、『十住心論』の卷第三を見てみると、次のように説かれている。

かくのごとく上首のもろもろの如来の印は、如来の信解より生ず。すなわち菩薩の標幟に同ず。その数無量なり。ないし、身分の擧動住止はまさに知るべし。みなこれ密印なり。舌根所転の衆多の言説はまさに知るべし。みなこれ真言なり。

（『弘法大師全集』第一輯・二五二―二五三頁）

このように、如来の印は如来を信解することによって生じるものである、これは菩薩の標幟（しるし）と同じであり、その数ははかり知れない。身体の動作はみなこれ秘密の印契であり、舌をはたらかせることによって生じる多くの言葉は、すべて真言であると解釈している。これは、いうまでもなく、『大日經』の引用である。

しかしながら、『大日經』においては「舌相」の語が用いられているが、空海は「舌根」の語を用いている。

他方、「舌相言語皆是真言」の語を天台宗の五大院安然（八四一～八八九）の『真言宗教時義』<sup>6</sup>や『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』<sup>7</sup>にみることができる。それぞれに「経に云く」として、「舌相言語皆是真言 身相拳動皆是密印」が挙げられているが、「所有の言語が真言である」との解釈の手がかりとなるようなものを見出すことはできなかった。

このような「所有の言語が真言である」といった解釈を明らかにするために、覚鑿の真言解釈を裏付ける重要なものである「三密」と「三平等」について次に見ていくこととする。

#### 四 「三密」と「三平等」について

「所有の言語が真言である」との解釈が成り立つものとして、「三密」と「三平等」が挙げられる。『真言宗即身成仏義章』において次のような解釈が示されている。

我が心はすなわち印、語はすなわち真言、心はすなわち本尊なり。これ三密平等平等にして法界に遍す。これを自の三平等と名づく。わが三平等と本尊の三平等と同一縁相なり。これを他の三平等と名づくるなり。ただ本尊とわれと三平等同一縁相なるのみならず。成未成の一切諸仏の三平等もまた同一縁相なり。これを共の三平等と名づくなり。

（『興大全』上・二七六頁）

このように、我が心が印であり、語は真言であり、心はすなわち本尊であるという。この三密は平等平等であり、

法界に遍じている。これを自らの三平等と名づける。自分の三平等と本尊の三平等と同一であり、これを他の三平等と名づける。ただ本尊と自らの三平等が同一であるだけではなく、成未成の一切諸仏の三平等もまた同一である。これを其の三平等と名づけると説いている。すなわち、自らの三平等と諸仏の三平等、つまり、三密は同一であると解釈しているのである。

また『打聞集』には、

真言は三密平等なれば、身も本有不思議の大日覚王の体、口もまたこのごとし。さらに身口は心より生ずと  
いわず。身は身、口は口、意は意、別別に常住本有なり。一体にしてさらに差別なし。

(『興大全』上・四一四頁)

とあり、仏と三密平等にされば、身体は大日如来の体そのものであり、口も同様である。さらに、身口は心から生じるのではなく、身口意は別々に常住である。身口意は一体であり、区別がないと説いているのである。

このように、三密は仏の三密と自身の三密が平等であることを強調して説いており、さらに平等であることが顕教との違いであることを強調しているのである。

また、『五輪九字明秘密密釈』においても、三密と三平等について次のように示されている。

初めの対治とは、まさに一切三世常住の仏界魔界、みなこれ法身本有の三密なりと観ずべし。かくのごとく  
の三密互相に渉入して一味平等なり。魔羅の三密とわが三密とが本来不二なり。すでに二法なし。あに障礙



あらむや。三密と三密と本来平等にして本不生なるがゆえに、諸仏・衆魔・同一法界なり。瑜伽の三密互相互に輪円して、損を離れ、減を離れ、諍もなく、怨もなし、所有の忿怒、すなわちこれ諸の教令輪身なり。動靜威儀、印契あらざることなく、所出の音声みなこれ真言なり。所念の意趣ことごとくこれ禪智なり。所有の随順可愛の諸相はまた如来の自性輪身なり。所説の真言、総持にあらざることなく、行住坐臥ことごとく印相なり。

〔興大全〕下・一一七一―一二二頁

このように、覚鑊は魔であっても、法身大日如来の三密にほかならないとして、仏と魔の三密が本来不二平等であると説いている。

また同じく『五輪九字明秘密積』に、

問う、諸教にまた三業の修善の業となす。今の宗の三密具足その義いかん。法仏の三密甚だ深細なり。(略) 動寂の威儀これ密印なり。音韻声響皆語密なれば、麤細の言語悉く真言なり。

〔興大全〕下・一一七九―一一八〇頁

とあり、法仏の三密に対する覚鑊の理解を示した文であるが、法界の内証に達すれば、動きは密印であり、音韻や響きはすべて語密であるから、言語は真言であると解釈されている。

このように覚鑊は、所有の言語や行住坐臥は、法身大日如来の加持力のおよぶものであるから、すべての言語

は真言であると解釈されているのである。なぜならば、仏の三密と自身の三密は同一にして不二なるものであるからである。

また、『虚空藏宝鍵』では三平等と三業について次のように説いている。

所作の事業は仏の事業と平等平等にして、虚空ごとくなるがゆえに。誦するところの真言は常恒に持者の三業に薰習して間断なきこと、虚空のごとくなるがゆえに。虚空藏尊はつねに行者の心月輪に住して、全く却退せざること虚空のごとくなるがゆえに。十方の三宝は行者の三業の中に集会して、また去るべからざるごと虚空のごとくなるがゆえに。無量の功德は行者の三業の中に聚集すること、なおし一切の色みな十方虚空の中にあるがごとくなるゆえに。

（『興大全』上・二十一～二十二頁）

このように、すべての所作は仏の動きと平等平等であり、それはまるで虚空のようである。誦するところの真言は、つねにこの真言を持するものの三業が薰習され、きれめなく続いていくことは虚空のようであるとし、また、虚空藏尊はつねに行者の心月輪に住しており、全く却退しないことは虚空のようである。また、十方の三宝は行者の三業の中に集会して、また去ることがないことは虚空のようである。このような無量の功德は行者の三業の中に聚まることは、一切の色がみな十方虚空の中にあるようなことであることが示されている。

このように、仏と自身は平等平等であることはすでに見てきた通りであるが、真言を誦することにより、その功德が自身の三業の中に集会し、無量の功德が得ることができると解釈しているのである。

このような解釈を前提として「所有の言語が真言である」との解釈を見てみると、真言を念誦することにより得ることのできる功德は、自身の三密と仏の三密が平等であることのみならず、常に自身の三業の中に集会しているから所有の言語が真言となり得ると解釈していたのではないだろうか。

## 五 おわりに

以上のように、覚饒は「所有の言語が真言である」との解釈を成り立たせるものの背景には、真言を念誦することにより、大日如来の加持力がはたらき、仏の三密と自身の三密が平等になるとの解釈があったといえる。また、平等になるだけに留まらず、自身の三業に常に真言を念誦した功德が与えられ、自身が発する言葉も真言となり得ると解釈していたのである。

このように、言葉の持つ不可思議な力を信仰することは、古代のインドにおいてヴェーダを起源とする真言（マントラ）等があり、日本においてもインド同様、古代から言葉の持つ不可思議な力を信仰していた。古代日本における言霊信仰である。言葉には不可思議な靈威が宿っていると考えられており、その力が働いて言葉通りの事象がもたらされると信じられていたのである。また、万葉集などには日本を「言霊の幸ふ国」と表現し、言霊の力によって幸福に恵まれる国であると信じられていたことから、言霊信仰が盛んであったことはいうまでもない。

言葉とは、言葉のもつ伝達方法として伝えるだけではなく、その言葉のなかに秘めたる思いや気持ちを伝えるものであり、言葉の持つその内面を理解しなければならぬものである。覚饒もその著作のなかで真言の持つ字義などのさまざまな意義を理解することが重要であることもたびたび説いている。その一方で覚饒は、真言の持

つ不可思議な力と功德により、常に自身の三業の中に不可思議な力と無量の功德とが集会することにより、「所の言語は真言である」と解釈されたのである。

註

(1) 『興大全』下・九三五頁

保安三(一一二二)年七月二十日の『立願大願事』には、「総じて八箇百万遍の功德、ならびに三世一切善根をもつて、みなことごとくその少分を余さず。併せてこの悉地成就のために廻向せしむるところなり。」との記述があることから、八度目に求聞持法を修した際の願文であることがわかる。また、翌年(保安四(一一二三)年正月二十七日)には、『求聞持立願文』が記されていることから、九度修されたことは明らかである。

(2) 覚鑊が二十九歳の時に求聞持法を修した際に立てた十大願(キーワード)

の第八に、「三七日夜不斷尊勝陀羅尼を勤修し奉るべし」(『興大全』下・九四二頁)とあることや、伝法院供養願文には、伝法堂に金色尊勝仏頂尊を造立したとともに、「念じ奉る当日内尊勝陀羅尼二万遍」(『興大全』下・一三五四頁)あり、「念じ奉る太上天皇の御息災、安穩、増長宝寿のために」とあり、覚鑊が太上天皇(鳥羽上皇)のために尊勝陀羅尼を二万遍念じ奉ることが記されている。

(3) 『興大全』下・一一五二頁

(4) 『真言宗全書』第三七・三三二頁・上

(5) 『興大全』下・一一五七頁

(6) 『興大全』下・一一七九〜一一八〇頁

(7) 『大正藏』七五卷・三八七頁・中

『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』では、『大日経』に云く」として「舌相言語皆是真言」の語が説かれているが、『大日経』には、「舌相言語皆是真言」との語はみることができない。

覚鑊 真言観 『五輪九字明秘密釈』一字入万病不生即身成仏頌